

St. Luke's International University Repository

Evaluation of a Health Education Program for Five-year-olds "Let's Learn about Our Body: Digestive System".

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松谷, 美和子, 佐居, 由美, 山崎, 好美, 石本, 亜希子, 白木, 和夫, 有森, 直子, 今井, 敏子, 西田, みゆき, 多田, 敦子, 相沢, 身江子, 臺, 有桂, 原, 瑞恵, 菱沼, 典子, 中山, 久子, 大久保, 暢子, 田代, 順子, 森, 明子, 岩辺, 京子, 島田, 多佳子, 木村, 千恵子, 三森, 寧子, 瀬戸山, 陽子, 村松, 純子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/1294

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



報告

5歳児向けの「自分のからだを知ろう」 健康教育プログラム：消化器系の評価

松谷美和子 ¹⁾	菱沼 典子 ²⁾	佐居 由美 ²⁾
中山 久子 ³⁾	山崎 好美 ²⁾	大久保暢子 ²⁾
石本亜希子 ²⁾	田代 順子 ⁴⁾	白木 和夫 ⁵⁾
森 明子 ⁶⁾	有森 直子 ⁶⁾	岩辺 京子 ⁷⁾
今井 敏子 ⁸⁾	島田多佳子 ⁹⁾	西田みゆき ⁹⁾
木村千恵子 ⁹⁾	多田 敦子 ¹⁰⁾	三森 寧子 ¹⁰⁾
相沢身江子 ¹¹⁾	瀬戸山陽子 ¹²⁾	臺 有桂 ¹³⁾
村松 純子 ¹⁴⁾	原 瑞恵 ¹⁵⁾	

Evaluation of a Health Education Program for Five-year-olds “Let’s Learn about Our Body: Digestive System”

Miwako MATSUTANI, RN, PhD ¹⁾	Michiko HISHINUMA, RN, MS ²⁾	Yumi SAKYO, RN, MN ²⁾
Hisako NAKAYAMA, RN, MA ³⁾	Yoshimi YAMAZAKI, RN, MN ²⁾	Nobuko OHKUBO, RN, PhD ²⁾
Akiko ISHIMOTO, RN ²⁾	Junko TASHIRO, RN, PhD ⁴⁾	Kazuo SHIRAKI, MD, PhD ⁵⁾
Akiko MORI, RN, PhD ⁶⁾	Naoko ARIMORI, RN, PhD ⁶⁾	Kyoko IWANABE, RN ⁷⁾
Toshiko IMAI, RN ⁸⁾	Takako SHIMADA, RN, MN ⁹⁾	Miyuki NISHIDA, RN, MN ⁹⁾
Chieko KIMURA, RN, MN ⁹⁾	Atsuko TADA, RN ¹⁰⁾	Yasuko MITSUMORI, RN ¹⁰⁾
Mieko AIZAWA, RN ¹¹⁾	Yoko SETOYAMA, RN ¹²⁾	Yuka DAI, RN, MN ¹³⁾
Junko MURAMATSU ¹⁴⁾	Mizue HARA ¹⁵⁾	

〔Abstract〕

This research is on the assumption that knowledge of the body is necessary for people to take initiative in their own healthcare. Prior research indicates that age 5 is the best age to start systematic education about the body. We have developed an educational program about the digestive system. This program was presented to 69 5-year-olds in two nursery schools and two classes of a kindergarten. Teaching aids include a panel theater (‘kamishibai’), picture book and a T-shirt depicting the digestive system. Nurse teachers presented the story “How an apple becomes a BM” using the panel theater. Then, the nurse teachers reviewed what they had presented, while manipulating the special T-shirt. From the T-shirt teachers could remove the parts, open the organs and show the stuffed fabric representing apples at various phases in their digestion. Lastly, each preschooler was given a picture book to take

- 1) 聖路加看護大学 看護教育学 St. Luke’s College of Nursing, Nursing Education
- 2) 聖路加看護大学 基礎看護学 St. Luke’s College of Nursing, Fundamentals of Nursing
- 3) 聖路加看護大学 保健師 St. Luke’s College of Nursing, School Nurse
- 4) 聖路加看護大学 国際看護学 St. Luke’s College of Nursing, International Nursing
- 5) 聖路加看護大学 病態生理学, 小児科学 St. Luke’s College of Nursing, Pathologic Physiology and Pediatrics
- 6) 聖路加看護大学 母性看護学・助産学 St. Luke’s College of Nursing, Maternal Nursing & Midwifery
- 7) 聖路加看護大学 非常勤講師 学校保健 St. Luke’s College of Nursing, School Nurse
- 8) 東洋英和女学院養護教諭 Toyo Eiwa Primary School, School Nurse
- 9) 聖路加看護大学大学院博士後期課程 St. Luke’s College of Nursing, Doctoral Course
- 10) 聖路加看護大学大学院博士前期課程 St. Luke’s College of Nursing, Master’s Course
- 11) 東京慈恵会医科大学附属病院看護師 The Jikei University Hospital, Nurse
- 12) 東京大学大学院博士前期課程 University of Tokyo, Graduate School, Master’s Course
- 13) 順天堂大学 医療看護学部地域看護学 Juntendo University, School of Nursing, Public Health Nursing
- 14) Baby in Me “Baby in Me” is the private activity for pregnant women
- 15) 聖路加看護大学 看護学部 St. Luke’s College of Nursing

home. Forty-five mothers and five nurse teachers responded to an evaluation questionnaire and indicated that this program was an incentive to learn about the body; that they expected a series of the programs; and that after the preschoolers returned home, they talked with their mothers and other family members about the digestive system using words they learnt. From our work we recognize that partnership with parents and nurse teachers is critical for continued program development. A cohort study is needed in order to evaluate the contribution of our program to understanding of the body.

[Key words] people-centered care, learning program, preschooler, development of educational materials, 21st Century COE Program

〔要 旨〕

人が自分の健康の主人公であるためには、身体のしくみの基礎的な理解が必要である。この考えに基づいた先行研究では、これを学びはじめる時期について、5歳児が適切であるという結論を得た。そこで、5歳児が身体のしくみを学ぶためのプログラム開発に取り組んでいる。今回は、消化器系プログラムを2保育園ならびに幼稚園2クラスで実際に展開し、評価することを研究目的とした。全体で67名の子どもがプログラムに参加した。プログラム構成は、紙芝居を見て、消化器Tシャツで遊び、絵本を持ち帰るといった内容であった。この消化器系プログラムは、園全体での情報の共有、具体的操作による知識の確認、家族との共有を可能にし、消化器系のお話が子どもをとりまく人々の共通した経験になることを可能にした。45名の母親および5名の保育専門家から回収した質問紙調査結果から、保育専門家はこのプログラムが5歳児の理解を助ける内容であったこと、身体のしくみを子どもと共に学ぶことを楽しみ、母親は、自分も一緒にもっと学びたいと答えていた。両者とも、さらなるプログラムの開発を期待し、こうした活動に関わりたいと考えていた。子どもに日々接している人々との協働企画と継続が、身体の知識の常識化にとって重要であることを再認識した。

今後は、さらなるプログラムの開発と評価、長期的にはコホート研究が課題である。

〔キーワード〕 市民主導、学習プログラム、就学前幼児、教材開発、21世紀 COE プログラム

I. 緒 言

人が健康を損ねたときに用いる医療は、検査と治療の技術がめざましく発達している。仮に検査や治療の実施について説明を受け、同意を求められる場合、説明内容は十分に理解できるだろうか。その基本となる身体の知識が不足している場合には、意思決定も難しい。理解できないところを尋ねようにも、それすら分からない。自ら保健行動をとり、治療法を選択できるようになるには、身体に関する基本的な知識をもつことが必要である。この研究プロジェクト（通称「からだを知ろう」キャラバン）は、身体に関する知識を人々の常識とすることを目標に活動を開始している。身体を知るプログラムを提供する対象として、先行研究¹⁾の結果、身体への偏見が少なく、身体への興味関心が芽生え、自分自身の身体への関心が高まる就学前の子どもとすることを決定した。この対象年齢の妥当性は文献でも裏付けられる²⁾。

今回の研究では、これまで当該プロジェクトが開発してきた教材の中から消化器系を取り上げ、絵本「わたしのからだ：消化器系」、紙芝居「わたしのからだ：消化器系」、および「消化器Tシャツ」を用いて、園児を

対象としたプログラム「リンゴがウンチになるまで」を展開し、このプログラムに対する園児、保育士、幼稚園教諭、保護者の反応を調査し、プログラムの評価を行うことを目的とした。

これまでに、Gellert (1962)³⁾をはじめ、疾病をもった子どもの身体の理解に関する研究や疾患のある臓器に焦点化した健康教育の研究が行われている。また、最近では、健康な子どもを対象とした身体の理解に関する研究も行われている^{4)~10)}。たとえば、田中と佐久間 (2003)¹¹⁾は、就学前の子どもを対象に人物描画法を実施し、ボディ・イメージの特性を分析している。このように子どもの身体の知識や理解を調査した論文はあるものの、幼児期から行う身体の理解と健康教育とを関連づけた論文は医学中央雑誌の検索では抽出されなかった。本研究は、身体の知識を基本に自分の健康を主体的に考えることのできる次世代を育成するという試みへの挑戦であり、意義深いものであると考える。

II. 研究方法

研究対象は、関東のA、Bの2保育園および都内私立



図1 絵本「わたしのからだ：消化器系」



図2 紙芝居と「からだの白地図」実演風景

幼稚園2クラスの5～6歳児，その保護者，および保育士と教諭である。研究期間は2005年10月1日～2006年3月31日であった。

研究対象となった施設は，キャラバンのメンバーからの紹介によって決定した。各施設には，事前に研究計画を説明し，研究への承諾を得た。その後，実施日程等の打ち合わせとリハーサルを行った。

このプログラムで用いた教材は，絵本「わたしのからだ：消化器系」(図1)，紙芝居「わたしのからだ：消化器系」(図2)，および「消化器Tシャツ」(図3)の3点である。消化器Tシャツは，Tシャツに取り外しおよび開閉自在の胃，小腸，大腸がマジックテープで接着され，消化管の中には消化過程のリンゴを模した布製模型が要所，要所に収められ，最後に便の形になって取り出せるようになっている。

プログラムは次の内容で構成した。

- ①それぞれの施設で園児を対象に，親，保育士または教諭が，紙芝居を用いて，リンゴの消化から排泄までのお話を園児との対話形式で行う。
- ②「消化器Tシャツ」での復習を行う。
- ③園児はお話を聞いた後，絵本「わたしのからだ：消化器系」を家庭に持ち帰る。
- ④参加した園児の保護者にこのプログラムに関する質問紙調査を行う。
- ⑤参加した保育士および幼稚園教諭にこのプログラムに関する質問紙調査を行う。
- ⑥お話の実施状況をキャラバンのメンバーが参加観察する。

また，幼稚園では，2クラスで実施するため，研究員4

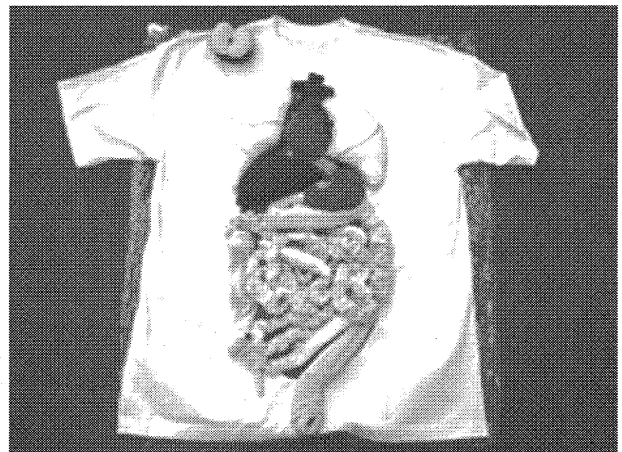


図3 消化器Tシャツ

名，担任2名を含む教諭らとともに教材検討会をもち，授業の質を保つように配慮した。また，キャラバンのメンバーである4名の観察者のうち1名の観察者が2クラスでの実施内容を観察し，内容に質的な差異がないことを確認した。

これらの方法によって得られたデータの分析は，保育園と幼稚園に分けて行った。保育園のデータは質的に分析を行った。幼稚園での観察記録については内容分析を行った。質問紙調査の結果は，コード化して集計し，量的に処理できるデータについてはSPSSを用いて統計処理を行った。各項目に関する度数分布を調べ，項目間の関係については χ^2 検定または直接検定を行った。有意水準は5% (両側) とした。記述回答については内容分析を行った。

倫理的配慮は，各施設に当該プロジェクトについて十分な説明を行い，このプログラムの実施を自発的に希望する場合には実施することとした。また，不都合なとき

には随時研究を中止できることを確認した。また、保護者への質問紙は無記名自記式とし、郵送法または回収箱によって回収した。集計データはコード化し、個人情報特定されないように配慮した。また、研究終了後すみやかにシュレッター処理を行うこととした。なお、本研究は聖路加看護大学研究倫理審査委員会の承認（番号05-047）を得て行った。

Ⅲ. 研究結果

実施状況が異なるため、研究の結果を保育園と幼稚園に分けて報告する。

1. 保育園

A 保育園では、当該キャラバンのメンバーがお話を担当し、3～5歳児14名、保育士4名が、B 保育園では保育士がお話を担当し、5歳児17名、保育士3名、栄養士1名がプログラムに参加した。質問紙は、保育士3名、保護者9名から回収した。

1) 紙芝居について

A 保育園ではシナリオに忠実に紙芝居が進められた。B 保育園では、保育士が日ごろ園児らに話しかけていることばを用いて話が進められた。園児との対話が多く、最後に「うんちのよく出る体操」を教えていた。AB 両保育園とも20～30分で終了した。どの園児も紙芝居に見入り、話に聞き入り、問いかけにもよく反応していた。A 保育園で実施したキャラバンのメンバーは、シナリオに忠実に演じたが日ごろ接していないので、特別の行事となり、負担感が大きかったと回答した。B 保育園で実施した保育士は、「子どもが予想以上によくわかっていた」と捉えていた。また、「大腸、直腸をとおって、うんちが出てきたところに子どもたちは最も感動していた」「小腸が長いのに驚いていた」と答えていた。

2) 消化器 T-シャツについて

保育士はこの T-シャツについて、子どもが胃や小腸を自由に操作できるために、興味が強まると回答した。特に、うんちが出てくるところはかわるがわる何度もくり返しやっていた。中には驚く子や、気持ち悪いと口に出す子もいたと回答していた。

3) 絵本について

保育士は、絵本について、「絵もことばもわかりやすい」「話が短くまとめられていてよい」という意見がある一方で、もう少し詳しい内容でもよいという意見があった。保護者は、子どもが母親と家族に胃袋、小腸、大腸、うんちということばを用いて消化器の話をしていただけると回答した。このような機会については、わかっている子どもに説明することがないので、よいきっかけになったと回答していた。

2. 幼稚園

1) 紙芝居について

年長組2クラス各19名の園児（女児15名と男児4名、女児14名と男児5名）を対象に午前10時25分から11時までプログラムが実施された。まず、幼稚園教諭が園児に、りんごがうんちになるまでの道を含んで見てみようと話しかけ、絵本「わたしのからだ：消化器系」の読み聞かせがなされた。その後、子どもの全身図を描いたボードを用いて、食べ物の通り道を確認しながらまとめを行った。さらに、1週間後、紙芝居と「消化器 T-シャツ」で全体の復習を行った。

絵本読み聞かせの間、園児は真剣に見聞きしていた。消化器の名称、働きを知っている児もいた。

「消化器 T-シャツ」を着た教諭が登場すると、「きもーい」の声も聞かれた。りんごが消化管の中でどのように形を変えていって、うんちになるのか興味津々の様子であった。特に、園児はうんちに大きく反応し、にわかになぎやかになった。小腸の長さや胃液の量などの質問をする園児もいた。約30分のプログラムに園児は集中できていた。

2) 幼稚園児保護者への質問紙調査の結果

アンケートの配布数40に対し回収数36（回収率90%、有効回答率100%）であった。回答者はすべて母親であった。質問の対象となった園児は、5歳児が7名、6歳児が29名、男児は11名（31%）であった。

(1) プログラム全体への子どもの反応

プログラムに参加した子どものほとんど（94%）が、家庭で「リンゴがウンチになるまで」の話題に触れていた。子どもが話をした相手は母親が最も多く、内容は、消化機能、消化所要時間、小腸の長さ、便の排泄、よく噛んで何でも食べることなどかなり具体的であった。母親は、子どもが得意げで、楽しげで、興味深げであったと報告している。「消化器 T-シャツ」を用いたために、臓器全体に興味広がった子どももいた。子どもがあまり積極的に話さなかったと回答したのは2件であった。

絵本で子どもが興味をもった部分は、胃、小腸、大腸、うんち、そして食べ物が消化され排泄されるまでのプロセスであった。絵本を使って母親に説明できる喜びを子どもが感じているようだとも母親は答えていた。子どもたちは絵本を繰り返し読み、ながめ、ぬりえを楽しんでいた。

また、栄養になる良いものを食べること、食事をゆっくり食べること、うんちをがんばって出すこと、うんちの色と形を見ることなどの身体を大事にする行為について、半数以上の子どもたちが母親に話していた。うんちは汚いものという認識から健康を教えてくれるものという認識に変化し、身体への興味が広がった子どもがいた。

また、「わたしのからだ：消化器系」の絵本について、

表1 からだのお話：テーマニーズ (複数選択) (n=36)

順位	テ ー マ	人数	回答全体に占める割合(%)
1	からだをばい菌やウイルスから守ろう	25	69
2	歯のお話	22	61
3	おしっこのできるまで	20	56
4	血液のお話	19	53
4	筋肉と骨のお話	19	53
6	頭のお話	18	50
7	赤ちゃんが生まれるまで	14	39
8	神経のお話	12	33
その他	心臓について、死について、命の尊さからだについて(2)、偏食がいけないわけ・栄養(2)、目のお話(人数)*(2)、薬が効くわけ、毛のお話、耳のお話、鼻のお話、脳のお話、アレルギーのお話		

身体を知ることに「役立つ」または「どちらかといえば役に立つ」と回答した母親は97%であった。1名の無回答については、子どもが絵本を手離さないために自分が見ることができなかったという理由からであった。

(2) 身体のお話へのニーズ

消化器系以外のお話へのニーズについては、表1のとおりである。「赤ちゃんがうまれるまで」については、神秘性を残したいので幼児には要らないという意見のほか、子どもが関心を持ち始めているので図書館で探したが、5歳児にふさわしいものがないので子どもが大きくなるのを待ちたいという意見があった。

(3) 保護者のキャラバンへの参加について

子どもの頃から身体の知識をもつという活動について、市民である母親はどのようにかかわろうとしているかを尋ねた結果、表2のように97%の母親が少なくとも1つを選び、家庭で子どもと一しょに絵本を読むという活動を選んでいった。また、子どもたちに身体のことを教えた母親も半数以上に上った。さらに、数パーセントの母親は、絵本作りや手芸による教材製作といった創造的な活動にも意欲を見せていた。

(4) きょうだいとのかかわり

対象となった子どもにきょうだいがいる場合、きょうだい間で身体のことを話題になったことがあるかという問いに、該当する24家庭のうち18家庭(75%)のきょうだい間で話題になっていた。

(5) 年齢、性別、きょうだいの有無と身体を大事にしようという気持ちの芽生え

回答の時点で年齢が5歳と6歳とでは、プログラム後に身体を大事にしようという気持ちの芽生えに有意な差はなかった(Fisher直接検定, P=0.23)。また、プログラム後の身体を大事にしようという気持ちの芽生えについても、性別による有意な差はみられなかった(Fisher直接検定, P=1.00)。同様に、プログラム後の身体を大事に

表2 「からだを知ろう」キャラバンのような活動へのかかわり (複数選択) (n=36)

順位	かかわり方	人数	割合(%)
1	家庭で一しょに絵本を読みたい	34	94
2	子どもたちからだについて教えたい	19	53
3	絵本作りに参加したい	2	6
4	手芸でキャラバンに協力したい	1	3
その他	子どもと一しょにお話を聞きたい		

しようという気持ちの芽生えについてきょうだいの有無による有意な差はなかった(Fisher直接検定, P=1.00)。

(6) 「からだを知ろう」キャラバンについての自由回答結果

自由記述の結果を今回の取り組みに対する回答と今後への示唆に分けて整理した(表3)。今回の取り組みについては、「積極的な肯定」および「取り組みの効果について」の記述に分けられた。積極的な肯定は延べ14件、効果および反応については30件の記述があった。

a. 今回の取り組みについて

積極的な肯定として、このプログラムの実施は良い機会であったという記述が6件あった。好機ととらえた理由として、日ごろ子どもの身体への興味関心が出てきていたこと、身近で大切なわりには話題にされにくく子どもとともに本を読みたいと思っていたことを述べていた。また、絵本およびT-シャツ教材への賞賛および感謝などが8件あった。

効果および変化について、子どもが内容を理解し説明したと記述したのは8件、興味を持てた様子を記したものが10件、楽しそうであった様子あるいは満足そうであった様子が9件記載されていた。さらに学んだことを実感して感動していたと述べた記述が2件、新鮮な体験ととらえる記述が1件あった。

b. 今後への示唆

今後への示唆では、身体全体を分かるために、定期的、継続的な活動を願うものが14件あった。そして、保護者も交え、工夫を凝らしたイベントとして繰り返し実施することで効果を積み上げていくことの重要性が提案された。

3) 教諭へのアンケートの結果

今回のプログラム実施前の絵本教材への印象は、絵がたくさん入っていて、分かりやすいというものであった。また、消化に絞ったお話は子どもの理解を得られやすいと予測している。そして、小腸の説明が難しいという印象を持ったと回答していた。

実施後の回答では、絵本への子どもの反応から、子どもの理解に合っていたと感じていた。絵本についてはかたい本という印象であったが、子どもと一緒に見ているうちに楽しい本という印象に変化していた。また、人体

表3 自由回答内容

(複数採用)(n=35)

今回の取り組みについての回答内容	件数 (内訳)
<p><u>積極的な肯定の意見</u></p> <p>〔好機〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日ごろ密接なわりに、教えてもらうことの少ないからだのことを知るとても良い機会に感謝している ・普段からだについて考える機会がなかなか持てません ・機会があったら、また、他の本も親子で読みたいと思います ・ちょうど最近になって、からだについていろいろと質問されている <p>〔賞賛・感謝〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・T-シャツなど子どもに分かりやすい工夫など素晴らしい活動です 	14 (6) (8)
<p><u>効果や変化</u></p> <p>〔理解〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもがお話の内容をよく理解していた ・小腸の働きなどは私はほとんど知らなかったの、子どもに教えてもらい、私も学ぶことができました <p>〔興味〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とても興味を持てたようです ・いただいた絵本は、その晩、寝るまで離さず、枕元に置いて寝ていました <p>〔楽しい・満足〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日のはからだのことたくさん教えていただいてすごく楽しかった ・普段幼稚園の出来事をあまり語らない子が、消化について楽しそうに説明してくれた ・多くは語ってくれませんが、とても楽しい経験であったようです ・まだ早いと特別教えたことがなかったが、どうしてあんな色や形のうんちができるのかと思っていたけどよくわかったと満足そうに、好奇心の満たされた笑顔 <p>〔感動〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食べ物が形状を変え、栄養になり、うんちへと変化することの不思議を、改めて感動したようです ・自分のお腹の中に長い腸が納まっていることをすごいことだと感じていた <p>〔新鮮〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日々当然のように行っていることの意味を知ることが新鮮 ・おなかと言っていたものも、胃や腸など名前があることを知り、部分で意識するようになり… 	30 (8) (10) (9) (2) (1)
<p><u>活動の継続</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・順序だてて取り上げてからだの全体像をつかめるようにしてください ・他のテーマでもぜひ教えていただきたい ・子どもに分かりやすく説明することはなかなか難しいことなので、この活動を広めていただきたい ・りんごにアレルギーがあったので、積極的に入り込めなかったが、絵本もT-シャツも素晴らしい内容なので、ぜひ第2弾を企画してください ・他の本も読みたい ・小さい単位での話は有効で、簡単に基本的なことを知ることができる 	14
<p><u>その他</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・消化の話に栄養の話も追加してほしい ・心の課題もとりあげて ・保護者も一緒にお話を聞きたかった ・他の年齢の子にも身体知識・重要性を理解する機会がほしい ・園という集団の場の利用が効果的 ・外から専門に勉強している先生が来て教えてくれたことが、効果があった ・絵本だけではなく、活動として回っていることに意義があると思う 	7

図や紙芝居でおさらいができたことで子どもの理解が確かなものになっていくことを実感できたと回答していた。予想外のこととして、消化のことを知っている子どもがいたことをあげていた。子どもの質問は具体的で、これに正しく答えるには、専門家がチームに入っていることが不可欠であると考えていた。教材およびプログラム全体の内容は5歳児に合っていたが、子どもの理解度に差があるため、これ以上の情報量を加えないほうがよいと答えていた。絵本は、子どもが手にとって何度でも読むことができ、アクセシビリティの点で優れた教材であ

ると考えており、用いた教材と同様の質の良い絵本を期待していた。消化器のはたらきについては、身近なことであるにもかかわらず、話題にしたことがなかったの、このような機会が刺激となった。このプログラムの実施を、園児たちは、いつもとは異なる特別なイベントとして捉えていたが、こうした活動を進めていくことは有意義であると感じたと述べていた。ここで消化器の働きを学んだあとは、食事のはなしにもつながり、よく噛むことやしっかり食べることへの理解にも影響を与えることができると感じていた。

IV. 考 察

この消化器系プログラムは、紙芝居や絵本の読み聞かせによる一斉学習、消化器T-シャツでのおさらい、絵本を持ち帰るという3つの内容で構成されていた。子どもとのやり取りを交えながら、全員でお話を聞くことにより、身体のしくみが子どもたちと保育者全員の経験になった。復習で用いた消化器T-シャツは、具体的で操作可能な媒体であり、取り外し自在、消化管から消化物を取り出すことも自在で、子どもたちはいろいろなことをためし、くり返していた。さらに、持ち帰った絵本を読み、園で学んだことを家族と共有していた。

このプログラムに参加した子どもの観察記録と保護者および保育士、幼稚園教諭への質問紙調査結果から、このプログラム内容が5歳児に無理なく受け入れられることが明らかになった。5歳児、すなわち、就学前の子どもたちは、身体の完全性や統一感というものに敏感で、関心を抱いている。身体の中で何が起きているのか興味を示す時期であり、自分の身体の一部が傷つくのを極端に気遣い、怪我には大げさに反応する。既に性の違いは知っており、男女どちらであるかを明確に意識している。そして、自分の身体機能を意識して具体的に確かめる。⁹⁾このような時期に、身体のしくみを理解することの意義は大きい。

園児は、家庭で母親やきょうだいなどに消化器系の話をしていることから、この一連のプログラムによって、身体への興味が伝えられ、他者にも影響を与えていた。日々子どもの成長を見ている保育士や幼稚園教諭は、子どもが身体のことをよく知っていることを発見し、身体の仕組みを子どもとともに学ぶことを楽しんでいった。母親は、この機会がよい動機づけになり、系統的にもっと学ばせたいと答えていた。保育専門家も親も、更なるプログラムの開発を期待し、この活動にかかわりたいと考えていた。

今後のプログラム製作および実施、評価に保護者と保育専門家が加わり、保健医療専門家と協働で取り組むことで、プログラムがより充実し、反復性、継続性が担保でき、生活につながった身体理解、身体についてのコミュニケーションの活性化、身体を大切にするというメッセージが社会の中に自然に育まれていくのではないだろうか。体温を感じる活動を重視したいが、Webを利用してアクセシビリティを高めることも重要であろう¹⁰⁾。この取り組みを、子どもをとりまく人々と協働で行い、

今回のようなプログラムを系統立てて、くり返し、継続的に進めていくことが今後の課題である。

V. 結 論

この研究で行った保育園および幼稚園における絵本、紙芝居、消化器T-シャツを用いたプログラム：「リンゴがウンチになるまで」は、消化器系のしくみの基本を学ぶプログラムとして5歳児にとって有効であった。

文 献

- 1) 菱沼典子他. 5歳児向けの「自分のからだを知ろう」プログラムの作製：市民主導の健康創りをめざした研究の過程. 聖路加看護大学紀要. 32, 2005, 51-58.
- 2) Salter, Mave. ボディ・イメージと看護. 前川厚子訳, 東京, 医学書院, 1992.
- 3) Gellert, E. Children's concepts of the content and structure of the human body. Genetic psychology monographs, 65, 1962, 293-411.
- 4) Brumback, R. Characteristics of the inside-of-the-body test drawings performed by normal school children. Perceptual and Motor Skills 44. 1977, 703-708.
- 5) Denehy, J. What do school-age children know about their bodies? Pediatric Nursing, 10(4), 1984, 290-292.
- 6) Marsh, H. W., Craven, R., and Debus, R. Structure, stability, and development of young children's self-concepts: a multicohort-multioccasion study. Child Development, 69(4), 1998, 1030-1053.
- 7) McEwing, G. Children's understanding of their internal body parts. British Journal of Nursing, 5(7), 1996, 423-429.
- 8) Nagy, M. Children's conceptions of some bodily functions. Journal of Genetic Psychology, 83, 1953, 199-216.
- 9) Vessey, J. A. Comparison of two methods on children's knowledge of their internal bodies. Nursing Research, 37(5), 1988, 262-267.
- 10) Vessey, J. A., Braithwaite, K. and Wiedmann, M. Teaching children about their internal bodies. Pediatric Nursing, 16(1), 1990, 29-33.
- 11) 田中千恵, 佐久間春夫. 人物描写法における幼児期の Body Image の特性について. 乳幼児教育学研究12, 2003.
- 12) <http://www.kidshealth.org/kid/index.jsp> [2006. 9. 15]